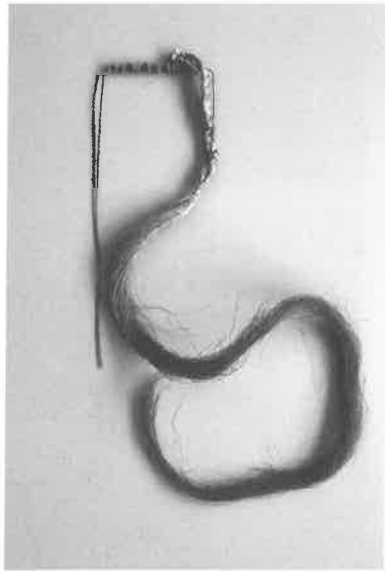
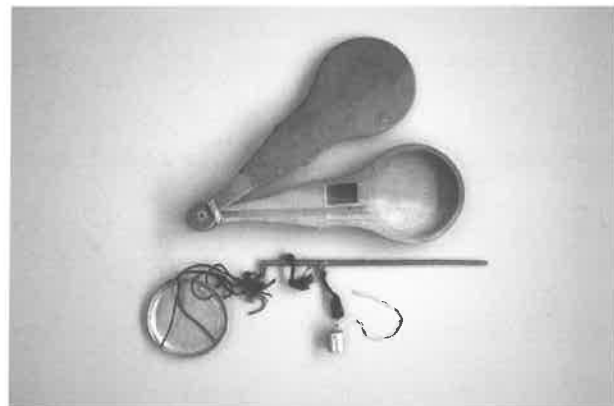


## 行商 —テグス船の生活—

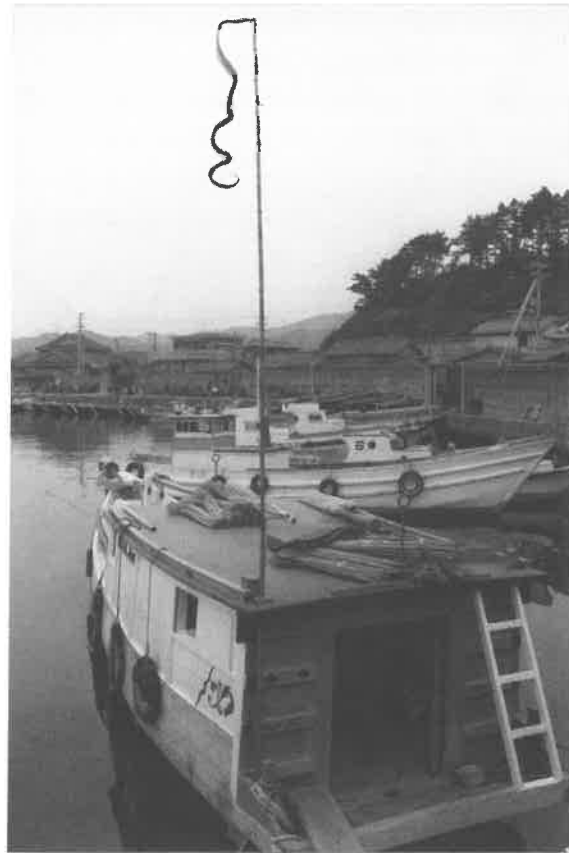
堂浦の漁民はカンコ船で瀬戸内海各地に出漁し、飲料水の補給や食糧、一夜の宿の提供などの代償として、一本釣りの技術やテグスを伝えました。その後、テグスの需要の高まりとともに、幕末にはテグス行商を目的とするテグス船が出現しました。船によるテグスの行商は堂浦のみで、これはかれらが行商人であると同時に優れた漁業技術者であったことが背景にあると思われまます。行商圈の広さは瀬戸内海全域に及び、行き先により「カミュキ」と「シモユキ」に分かれ、「カミュキ」は瀬戸内海の東部を、「シモユキ」は西部を巡回しました。多くは夫婦2人で4月の上旬に堂浦を出発し、秋の11月～12月に帰港しました。この間、堂浦に帰るのは1日か2日程度でした。海上で釣具を漁民に売る沖売りなど、海上の行商ならではの特有の商いの方法がとられました。



テグスを使ったカンバ(看板)昭和8年(1933)製作  
徳島県鳴門市瀬戸町堂浦  
国重要有形民俗文化財 当館蔵



デテング(ハカリ)大正時代製作  
徳島県鳴門市瀬戸町堂浦  
国重要有形民俗文化財 当館蔵



カンバ(看板)を立てたテグス船  
高橋克夫氏撮影



テグス販売時にデテング(ハカリ)でその重さを計る作業の再現  
高橋克夫氏撮影

## 網漁 —海上信仰—

網漁の操業では、漁民は目にする事ができない海面下の様子を、海面に浮かぶ浮きや浮樽の動きで判断しました。特に網の中心の浮きや浮樽は魚が袋に入ると、激しく動き、まるで生き物のように魚の入り込みの様子を漁民に伝え、そこに大漁の神が宿ると信じるオオダマ(網霊)信仰が芽生えました。また、網船の船内に船を守護する船霊や大漁を招くと信じられたエビス・ダイコクが祭られ、大漁祈願の神札が安置されるなど、海上を生活の場とする漁民ならではの信仰が発達しました。



オオダマアバ 昭和26年(1951)製作  
香川県三豊市詫間町生里 タイシバリ網漁時に使用  
国重要有形民俗文化財 当館蔵

## 網漁 —海上生活—

瀬戸内海ではタイ網やサワラ網など大型のまき網が発達しました。タイやサワラが産卵のため回遊する4月～6月の時期は忙しく、漁民は海上生活を送りながら操業を続けました。船内には漁民の生活を支える用具が簡素ですが取りそろえられ、物資補給のための運搬船が往復しました。さらにこのような海上生活を可能にしたのは、仲買商人の存在であり、魚の回遊の状況や、鮮度を考慮しながら、最適なタイミングで船を見つけ、海上で魚を買い、これを迅速に消費地に運びました。



六島沖(笠岡諸島)のシバリ網漁で捕れたサワラを海上で売る様子  
高橋克夫氏撮影



食器箱(蓋は将棋盤に利用)昭和40年(1965)頃まで使用  
香川県三豊市詫間町大浜 タイシバリ網漁時に使用  
国重要有形民俗文化財 当館蔵



チギ(写真上)昭和30年(1955)頃まで使用  
タマ(写真下) 昭和時代  
香川県香川郡直島町 タイ網漁時に使用  
国重要有形民俗文化財 当館蔵  
捕れたマダイをタマに入れ、チギで重さを計り海上で売る



釜と台  
昭和30年(1955)頃製作  
香川県観音寺市伊吹町 タインバリ網漁用  
国重要有形民俗文化財 当館蔵



水汲みに使用したタゴ  
昭和45年(1970)まで使用  
香川県高松市男木町 サワラ瀬曳網漁用  
国重要有形民俗文化財 当館蔵

## 瀬戸内海を越えて

回遊する魚を追う漁業の技術的な特性は、漁民の広域な活動を促し、瀬戸内海を越えて太平洋や日本海にも及びました。たとえば、香川県さぬき市津田町の漁民は、瀬戸内海や紀伊水道でサンマ漁を行うとともに、昭和時代にはいと、サケ・マスを求めて、北海道沖に出漁し、流網でこれを捕獲しました。また、大分県臼杵市の漁民はすでに明治時代から豊後水道でモリを使った突きんぼう漁でカジキを捕っていましたが、さらに魚を求めて対馬等へも出漁するようになりました。



大分県臼杵市上浦(臼杵)漁港に停泊する突んぼう漁の船  
令和2年(2020)調査・撮影

民俗学者の宮本常一氏などにより瀬戸内海の古来からの海上生活の伝統は注目されてきました。しかし、海上での生活の具体的な様子は十分には明らかにされず、展示により提示されることも多くはありませんでした。

瀬戸内海の海上生活について、主に海上で使用された民具を中心に展示をして、具体的な生活の様子を紹介し、漁撈と商売という生業が海上で結びつき海上生活を成り立たせていたことや、海上生活の中からさまざまな信仰が発達したことなどを提示してみました。

【協力】 高野正光・武南克子・福山観光コンベンション協会

【参考文献】 瀬戸内海歴史民俗資料館「瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具と習俗」1978年

本展は、みなとの博物館ネットワーク・フォーラム助成事業(巻頭はロゴマーク)として開催しました。

瀬戸内海歴史民俗資料館 令和3年度テーマ展

「瀬戸内海の海上生活」

解説シートvol.R3-3 (通番No.30)

担当 真鍋篤行 副担当 芳澤直起 真鍋貴匡 川西敦 令和3年7月10日発行

瀬戸内海歴史民俗資料館 高松市亀水町1412-2

TEL 087-881-4707 <https://www.pref.kagawa.lg.jp/setorekishi/>



## 瀬戸内海の海上生活

◆会場 瀬戸内海歴史民俗資料館 第9・10展示室  
◆会期 令和3年7月10日(土)~9月26日(日)  
(臨時休館 令和3年9月6日(月)~13日(月))

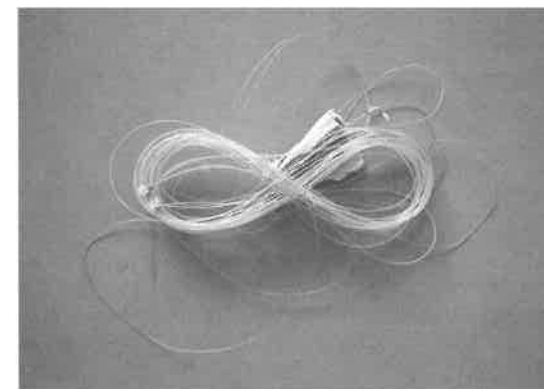
瀬戸内海では、行商や漁撈活動などで海上生活が行われる例が多く見られました。徳島県鳴門市瀬戸町堂浦<sup>どうのうら</sup>の漁民は、カンコ船で瀬戸内海全域に出漁し、釣糸のテグスを各地に伝え、その需要の高まりからテグス船で行商を行うようになりました。また、瀬戸内海ではマダイやサワラなどを捕獲するため、漁期の間、船上で生活をしながら網漁を行いました。そのため、捕れた魚は、海上で商人に売られ、運搬船で消費地に運ばれました。海上は漁撈の場であると同時に交易や日常生活の場であったのです。

さらに海上は信仰の場ともなりました。船内には船を守護する船霊<sup>ふねたま</sup>や大漁祈願のためのエビス・ダイコク、神札などが安置されました。また海上に浮かぶ網の浮きや浮樽が大漁をもたらすオオダマ(網霊)として信仰されるなど、海上の生活から特有の信仰が形成されました。

このような瀬戸内海の海上生活について、そこで使用された民具を中心に展示し、その生活の具体的な様子を紹介します。

## 釣り漁 —テグスを広めたカンコ船—

鳴門海峡はタイヤズスキの一本釣りの好漁場で、鳴門の漁民は速い潮流と渦巻きの間をぬうため、軽快で船あしの速い三枚板造りのカンコ船で操業しました。魚の種類に応じてさまざまな釣針を使いわけ、江戸時代には生糸や麻糸に変わり、透明で弾力性と耐久力のあるテグスの釣糸が使われ始めると、これを積極的に導入しました。瀬戸内海の沿岸には消費地が多く、仲買商人の活動も活発であったことから、鳴門の特に瀬戸町堂浦の漁民は数隻のカンコ船で船団を組み、瀬戸内海一円に出稼ぎの漁に出て、各地で魚を売り、その優れた一本釣りの技術とテグスを伝えました。



カンコ船漁民が使用した本テグス(天然テグス)  
昭和40年(1965)頃まで使用  
徳島県鳴門市瀬戸町堂浦 国重要有形民俗文化財 当館蔵



カンコ船(当館第1展示室)  
昭和47年(1972)まで使用  
徳島県鳴門市瀬戸町堂浦 国重要有形民俗文化財 当館蔵



山口県沖家室島製のカム口針  
昭和40年(1965)頃まで使用  
徳島県鳴門市瀬戸町堂浦 国重要有形民俗文化財 当館蔵